

## 1. 本論の目的

本論は、近年の生成文法における併合 (Merge) とコピー (Copy) の関係を整理し、Chomsky (2021) で提案されたコピー形成 (FormCopy) がもたらす理論的な帰結を検証する。従来、内的併合 (Internal Merge) に組み込まれた形で形成された統語対象物 (Syntactic Objects) のコピーの実態を再考し、コピー形成による説明が現在の生成文法における極小主義が目指す真の説明という目標にどのような役割を果たすのかを考察する。具体的な現象として Standard Indonesian の義務的コントロールを派生させるのにコピー形成が重要な役割を果たすことを見ることで、この操作の妥当性を示していく。

## 2. 併合, コピー, コピー形成の関係について

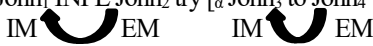
Chomsky (2021: GK) は構造構築の操作は併合のみであり、さらにこの統語派生はマルコフ過程で進むということを仮定している。この仮定に基づくと、統合派生の計算は一つ前の段階しか参照することができなくなる。つまり派生の歴史に基づいて何か計算や操作を行うということが厳しく制限される。これまで内的併合により形成されたコピーである統語対象物と外的併合により派生に導入された統語対象物とが、「同じ」統語対象物であっても操作の違いによって区別することができた。これはいわゆるコピーと repetition として扱われてきたものである。内的併合において形成されるものはコピーとして、外的併合によっては repetition とされる。しかし、このマルコフ過程での統語演算を考えるとこの区別ができなくなる。それを解決するために GK ではコピー形成という操作を提案した。これにより、例えば (1) で示す話題化の派生では、元々の生起位置に外的併合で導入された  $Bill_2$  がその後内的併合により  $X_1$  の位置へ、さらに文頭の  $X$  の位置へと動く。この時マルコフ過程による演算では文頭の  $Bill$  と元位置の  $Bill_2$  との同一関係はわからない。そこでコピー形成によって、まず  $\langle Bill, Bill_1 \rangle$  と  $\langle Bill_1, Bill_2 \rangle$  という派生の一つ手前同士のコピーペアの関係が形成される。そして、 $Bill_1$  を介して  $Bill$  と  $Bill_2$  との同一関係が保証され、結果として元位置の  $Bill_2$  が削除される。

- (1) FormCopy による話題化の派生
  - a. Bill, John met yesterday.
  - b.  $X, [John_1 \text{ INFL } [X_1, [John_2 \text{ [meet } X_2 \text{ yesterday]}]]]$
  - c.  $X = \text{Bill}: \langle \text{Bill}, \text{Bill}_1 \rangle, \langle \text{Bill}_1, \text{Bill}_2 \rangle$

派生がマルコフ過程で進むという仮定に基づくコピー形成は、併合操作に組み込まれていたコピーと repetition の区別を自然な形で導くことに成功した。

## 3. コピー形成による PRO の派生

GK では、コピー形成によってこれまで PRO として仮定されてきた要素を原理的に捉えることに挑戦している。これまで PRO は、移動の元位置に残る痕跡 (trace) と比較の下、その性質の特殊性が言われてきた。どちらも非頭在的な要素ではあるが PRO は今でいう外的併合によって派生に導入されるが、痕跡は内的併合により移動した要素が元位置に残す要素である。痕跡は後にコピーに取って代わられたが、PRO は独立した要素として残ったままである。理論的な面から言うと、PRO の内実をもっと原理的なところから還元できることが望ましい。これに対しては Homstein (1999) などがコントロールの移動分析により、PRO も痕跡の一種であると提案してきたが、この分析にも問題があることが指摘されている。そこで GK は PRO をコピー形成により捉えなおしている。

- (2) FormCopy による PRO の派生
  - a. John tried to win.
  - b.  $[\beta \text{ John}_1 \text{ INFL } \text{John}_2 \text{ try } [\alpha \text{ John}_3 \text{ to } \text{John}_4 \text{ win}]]$ .  

  - c.  $\text{John}_1 = \text{John}_2, \text{John}_3 = \text{John}_4, \text{John}_2 = \text{John}_3, \text{John}_1 = \text{John}_3$

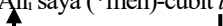
(2) に示すように義務的コントロールの派生は、次のように考えられる。まず、非定形節内で  $John_4$  が外的併合により導入される。そして  $John_4$  が内的併合により  $John_3$  の位置へと動く。派生が主節に進み、 $John_2$  が外的併合により導入される。そして  $John_2$  が  $John_1$  の位置へと動く。 $John_1$  と  $John_2$ 、 $John_3$  と  $John_4$  の関係は派生の一つ手前同士の演算なので内的併合によりコピー関係が保証される。ポイントとなるのは  $John_2$  と  $John_3$  の関係である。この2つの統語対象物は何の関係も持たないことになるが、コピー形成操作により  $John_2$  と  $John_3$  が同一要素として解

積される。John<sub>1</sub> と John<sub>2</sub> が同一要素であることから John<sub>1</sub> と John<sub>3</sub> が同一要素として解釈され、結果的に義務的コントロールの解釈が生まれる。この John<sub>3</sub> がこれまで PRO と仮定されていたものと同じことになる。このようにして PRO という特殊な要素を独立に想定することなしに説明を与えることを可能にしている。

#### 4. コピー形成の妥当性について：Standard Indonesian の義務的コントロールの分析

本節では、コピー形成の妥当性について経験的な面から支持を与える。Sato (2011) は Standard Indonesian の義務的コントロール（以下 OC in SI）が Hornstein (1999) のコントロールの移動分析の反例になると主張している。

(3) が OC in SI の例である。OC in SI は Hornstein (1999: 73) が示している義務的コントロールの特性を持つことを Sato (2011: 271-2) は述べている。その上で Hornstein (1999) のコントロールの移動分析に問題があることを示している。(3) の OC in SI に示されているように動詞の *try* に Active Voice の接頭辞の *meN* が付加している。この接頭辞の特徴としてこの接頭辞が付加している動詞を飛び越える移動がある場合にこの接頭辞が削除される必要がある。これを示したのが (4) である。この例では名詞句の *Ali* が動詞の *pinch* を超えて移動している。この時接頭辞 *men* は削除されなければならない。この事実に基づくと、(3) の例で Hornstein (1999) のコントロールの移動分析が採用されたとすると、名詞句 *Esti* が動詞 *try* を超えて移動することになるので、接頭辞の *men* が削除されると予測される。しかし、この接頭辞は削除されないので Hornstein の分析には問題となる。

- (3) Obligatory Control in Standard Indonesian:  
 Esti \*(men)-coba memasak makanan Jepang.  
 Esti AV-try cook food Japan (Sato (2011: 268))
- (4) Active Voice の接頭辞 *meN* の特徴  
 Ali<sub>i</sub> saya (\*men)-cubit *t<sub>i</sub>*.  
 Ali I AV-pinch  
 ‘I pinched Ali. (object preposing)/Ali was pinched by me. (passivization)’ (Sato (2011: 269))
- (5) Ali<sub>i</sub> saya (\*men)-cubit *t<sub>i</sub>*.  


Sato (2011) では、Hornstein (1999) のコントロールの移動分析への反例を提示しているのみで、実際の OC in SI の派生については言及が特にない。この派生がどのように生み出されるかを考えることが重要である。この OC in SI の特性は、コピー形成による PRO を再定義した方法により導かれることになる。

- (6) Esti<sub>1</sub> men-coba [Esti<sub>2</sub> memasak makanan Jepang.]  
 EM EM  
 Esti<sub>1</sub> = Esti<sub>2</sub>

(6) に示すように、まず非定形節に Esti<sub>2</sub> が外的併合される。その後派生が進み Esti<sub>1</sub> が主節に外的併合で導入される。主節の動詞には接頭辞が付加しているので Esti<sub>2</sub> が *try* を超えての内的併合は起きない。その代わりにコピー形成が適用され、Esti<sub>1</sub> と Esti<sub>2</sub> が同一要素として解釈され、Esti<sub>2</sub> は削除されることになる。コピー形成により OC in SI に起きる接頭辞の特性も自然な形で捉えることができる。まさに移動による関係づけが関与しないもの同士を同一要素、つまりコピーとして捉えるためのコピー形成の妥当性が示されていることになる。

#### 5. 結語

近年の生成文法における併合 (Merge) とコピー (Copy) の関係を整理し、Chomsky (2021) で提案されたコピー形成 (FormCopy) がもたらす理論的な帰結を検証した。これまで移動に課せられていたコピー関係が移動が関与しないものにもコピー形成を通して関係付けられるものであること確認し、このコピー形成が経験的に支持されることを Standard Indonesian のデータから指示した。PRO という特別な想定をすることなく、非顕在的な要素に対する理論的な説明を可能にできることは生成文法理論にとっては望ましいものである。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu*, 160: 1-41.
- Hornstein, Norbert (1999) “Movement and control,” *Linguistic Inquiry*, 30: 69-96.
- 宗像 孝 (2024) 「コピー形成の最適化に基づく統辞研究の諸相」, 『極小主義における説明理論の挑戦 最適最小性が導く併合とコピー演算』, 石井 透, 後藤 亘, 小町将之, 宗像 孝 編, 70-79, 開拓社.
- Sato, Yosuke (2011) “On the Movement Theory of Obligatory Control: Voices from Standard Indonesian,” *The Canadian Journal of Linguistics*, 56, 2: 267-275.